

わが碑よ

一千首の四分の三を乱れ詠みわが碑ぞ三十一文字は

蘇生

初春に時紡ぎ出す宙あれど花やおそきと鶯ぞなく

ひとまね

笹鳴きの声微かなる高台を初音が原と頼朝名付けむ

弁慶

枯紅葉碧を従へづんと立つ幽かな息吹枝先に籠め

海月

寒冷に肩をすぼめるわが前に白き光に映える鱗芽

蘇生

風を読む巢立ちの鳥のつぶらな瞳葱の坊主がうなづきてをり

真奈

鴨鳴くや一文字草の畑の際寒き流れに群れて漂う

弁慶

葛湯にも春の香がするオイ猫よホーホケキヨとは鳴かないもんか

海月

信長に猫をあずけて見ましようよホケキヨと鳴いて命乞うかも

蘇生

銀の猫子等に与えて西行は東を目指しスタスタと行く

弁慶

どうせなら家康にしてちょーせんかミヤーミヤー鳴いとりゃケキヨと聞くがや

海月

陸奥までは主君のために延年の舞を舞はうよ鈴掛の衣

丹仙

いつはりの勸進旅と知りつつも判官びいきのせきぞかねつる

ひとまね

西行の誉めし桜の束稲(たばねし)の山は吹雪の夕間暮れかな

弁慶

庚申をなぞて照らさむ寒月や花を待ちつつ酒を酌みしや

海月

梵語でも漢国(からくに)人の言葉でもなく和語にて月の悟り開けり

海斗

手鞠唄 ひふみよいむなや ここのとを あけてぞ今朝は逢ふを許され

紀

関の石踏みてしのびしほととぎす破れ築地に細き道あり

真奈

衣の裾からげて渡る浅川の底石おほふ天鷲絨の苔

千種

白河の以北は雪の広の原冬將軍の占領地かな

弁慶

君知るや水底深く沈む日に魚(いを)の心の揺らぎ靡くを

紀

どんよりと鉛色した磯潮に冬陽をあびる小魚の群

蘇生

松原に風吹きわたる冬の海沖合い遙かカモメ群れ飛ぶ

弁慶

オフェリアの想ひは知らず水面には裳裾拡がる睡蓮の花

紀

緑なる裳裾を揚げ鳥毛立つ飛鳥の女人(ひと)の声麗しき

弁慶

水無瀬川下ゆ深きにねぶりたる日はまた昇り裳裾輝く

海月

水無瀬川岸辺の里の白梅の匂いし彼方に雪の遠山

弁慶

雪解けの水満来たる我が心汝を慕ひつつ溢れゆくかも

紀

白湯やさし涙涸れある真底にさやさやさやと沁み渡りゆく

ばばな

さやさやと小夜の中山吹く風に妹の黒髪波打ちにけり

弁慶

親離れ子離れともにせつなくて小夜吹く風に揺るる星影

たまこ

小夜更けてマナ・モ・ドの音微か嬉しかりけり君からの te1

弁慶

小夜千鳥鳴きつる声も波に消へ恋てふ祈り月に届くや

海月

三ヶ月に願いをかけし武者のごと君への想い月に祈らん

弁慶

その人の吸ひて吐く息我がものと思ひつめたる真夜の静けさ

紀

恋しさに月夜も闇もひたすらに君を偲んで夜を明かすかな

弁慶

可惜夜の花の囁き聞きをればただふうはりと散るがのぞみと

真奈

散る花に己の姿重ぬれば音さへいとしと思ふこの夜は

茉莉花

黙想の夜にたゆたふ舟あれば眠りも深く黄泉の底まで

紀

渡し守雑談の末ふと云ふた誰が渡さむ汝と我とを

海月

駈けぬけし足裏白き少年の吊り橋揺する声のさざめき

奈都

吊橋の揺らぎに竦む乙女子の手を取り歩むたおやかな手を

海斗

そよ風の吹けば岩間に巢立ちたる燕の子らの美は

奈都

陽だまりに遊ぶ子雀寒九の日忘れ鉢にも萌ゆるもの見ゆ

真奈

冬の夜に一人生きるは寂しからむ小豆煮るなり母思ひつつ

奈都

ストーブでポトフ煮ながら返事書く腹出し猫がパーをした

海月

ストーブを囲みて話すあれやこれ結論いつも景気悪いね

弁慶

春の星じつと見つむる猫のごと今宵のことは忘れてしまふ

奈都

思い出は何故にか深く沈みいて時に呼吸しまた沈みゆく

蘇生

思い出を取り出してみるその時は心が静かに濡れているとき

茉莉花

忘るゝは忘れなきこと忘れ草身につけ給へ冬にしあれも

海月

悪ガキのカダファイいつかわけ知りの大人になったこれでいいのか

真奈

喫茶店君を待ちたるさざめきの紫煙に嗅ぐは微かなる罪

奈都

ニトロ持つ身となる我を知りてより煙草控える君のやさしさ

茉莉花

慰みのHOPE三箱をやめて知るヤニにまみれて臭きことごと

蘇生

凍る夜の温き血糊の跡形無し朝の駅踏む億千の足

ぼぼな

血ぬられし眼鏡洗はぬレノンの忌マンハッタンのビル透かし見る

奈都

コキコキと凍てる砂漠や血が落ちぬ狐はガキでただ老ひただけ

海月

雫石凍てし川面の雪のうえ野狐らしき足跡のあり

弁慶

みずぐきのあとつるわしき歌みれば昔も今も変わらざるひと

ひとまね

とび梅の真咲きの白を慈しみ今も変わらぬ祈る心は

蘇生

アツシジの地にも平和を祈るらむ水琴窟の微かなる聲

奈都

愛される者より愛す者なれと聖フランシス祈り給ひき

千種

海洞実の弾けるごとく自爆せる幼き顔の痛ましきかな

真奈

真実の生をも知らぬ幼子が自爆を知るや殺すは誰ぞ

蘇生

若者の不作法嘆く中にひとり「我々が悪い」と厳しき声飛ぶ

茉莉花

紅白の梅の花咲く奥津城へ垂乳根の母は旅立ちにけり

弁慶

つむり病み枇杷むく母の細き指どれみふあそらしど歌ふソプラノ

真奈

枯葎そのままにして母いないテンテケ太鼓叩いてみよう

海月

初孫を抱きて歌ふその聲はわが母の唄聴くも懐かし

奈都

たらちねの落語オペラのベルカント鶴女手をつきあーらわが君

真奈

清六が安藤二蔵に胸肉の五百匁を迫る新作

千種

鏡片でリスカしたる子また来る胸が寒いのが全部が嫌い

海月

風寒き流れの岸に翁いて織部の緑の川海苔を採る

弁慶

裸木は風の記憶に脊を伸ばし春の希みに顔をあげたる

真奈

春を待つ願いの強さ水仙の黄と白に染む英国の苑

茉莉花

ふりそめし雪をおさめて願ふごと八十葉の椿天を窺ふ

奈都

淡雪の降るゆかしさよ夕暮れの旅寝の宿の露天風呂かな

弁慶

遠目には白き花おく梅が枝は盛りし紅に添ひし初雪

蘇生

白梅がちららほららと雪のなか神籤をつけて咲き誇るごと

海月

寒中に屹立として凜として梅に男の姿重ねる

茉莉花

嚴寒に楚々と咲きたる紅梅は手甲佩びたる早乙女のごと

蘇生

いにしへの紅鶯宿と詠まれける和泉式部の梅は軒端に

真奈

淡雪がまだらに残る北屋根の真下に紅き梅の勢い

蘇生

ひすがらの吹雪に逢へど永平の一華を蔵す古き梅の樹

丹仙

早咲きの「河津の桜」咲きにけり年のはじめにかすみ立つらし

弁慶

桜待つ消灯後にも雪やまず蹴倒すか雪燃やそつか雪

海月

明日あるを待む心の櫻花流るる雲の母の背に似て

真奈

梅桜の模様あしらう西陣の帯しめし君の麗しきかな

弁慶

鶯の色の留袖身にまとひ春の訪れ心踊りて

李花

石臼に杵下ろす度子供らの国の母音の立ち上るなり

ぽぽな

日本語の柔くやさしき響きなる方行鼻濁音すでに古りしか

茉莉花

和やかにやさしき声で「無縁坂」歌いし母も今はいませず

弁慶

坂の名はのぼり坂とかくだり坂胸突八丁さびさびと風

真奈

寒ざれて笑っちゃうよな抜けた空ねこ付いてくる豆腐屋の坂

海月

幼き日坂のぼり来る豆腐屋の間延びした声今はなつかし

弁慶

吾を歌にいざないしその一冊は松下竜一「豆腐屋の四季」

茉莉花

竹の子の傘を被りて豆腐小僧江戸ご府内に配る妖怪

真奈

護符降るええじゃないかやえじゃないか山河在りとは露知らぬ冬

海月

フィヨルドのほとりにいつか帰る人声ひっそりとソルベージ歌ふ

千種

桃李和歌連作百首歌集

第五三〇一首より五四〇〇首迄

平成一六年一月五日より平成一六年一月二二日